黄の花

一ノ瀬　綾

●著者略歴

一ノ瀬　綾（掛川たつよ）

1932年6月19日、長野県小県郡武石村に生まれる。

1969年、小説「春の終り」で第12回農民文学賞受賞。

1976年、『黄の花』で田村俊子賞受賞。

「だん」の会会員。新日本文学会会員。

小説「雪の町」「傷痕」紀行文「ソ連冬の旅」等を

「だん」に発表。

現住所　東京都江東区牡丹2ノ9ノ16 東豊エステート421

黄　の　花　　0093—0067—4249

1976年8月25日第1刷発行

1976年9月5日　第2刷発行

著　　者　一ノ瀬　綾

発 行 所　株式会社　創樹社

電話　東京 815・3331(代)　振替東京・154580

東京都文京区湯島2・2・1　〒113

本文印刷　平河工業社

製　　本　美成社

装　　幀　早川良雄

1976 © Aya Ichinose　乱丁・落丁本はお取り替えします。

黄の花

一ノ瀬　綾

創樹社

目次

黄の花 5
焼く 27
奪う者 59
地下足袋 97
ある屈折 113
春の終り 153
あとがき 189
跋——久保田正文 194

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黄の花

冬子と久夫は一つちがいだった。来年は中学生になりますと、母親のお葉さんが挨拶の後で言った時、冬子はわけもなく息がつまって、久夫をはっきり見ることができなかった。お葉さんの言葉は、やさしい東京弁であった。

「生憎、どの子もこちらのお嬢ちゃんとは学年がちがいますが、どうかよろしくお願い致します」

父と母が向い合って坐ったいろり端の奥から冬子は、上り框に並んだ母子の五人連れをのぞくように眺めた。久夫は黒サージの学童服を着て、女学生の姉と、二人の妹にはさまれてきちんと坐っていた。

お葉さんは、黒地に緑色の笹の葉を細かく描いたきれいなもんぺの上下を着ていて、冬子と視線が合うと、にこっと笑った。生れて始めてお嬢ちゃんと呼ばれた冬子は、いっぺんにお葉さんが好きになって、セーターやズボンに継ぎの当った身仕度のその一家が、今迄見なれたどの疎開者達より小ぎれいで上品に見えてくるのであった。

その日から久夫の一家は冬子の家からほど近い農家の奥座敷で暮すようになった。父の世話であった。五十戸ほどある部落のうち、疎開者を置いてない家は数えるほどで、冬子の家もその一つであった。空家はもとより、雨の漏るたき木小屋まで手入れをして人が住み、部落の遊び仲間や学級にも、都会言葉の子供がじゃまになるほど殖えて、冬子はそういう仲間達から今迄知らなかった色々な知識を吸い取ってきた。それだけに、自分の家に世話をする疎開者が居ないことに冬子は、いつ

も淋しさと友達に対する引目のようなものを抱いていた。

「どうしておら家には、疎開してくる人達が居ねえのかなあ……」

ことあるごとにぶつける冬子の不満を、母は声をひそめてたしなめた。

「ばかを言うものでねえ。疎開者なんかどこがいい。焼け出されや子供連れと同じ家で暮してみな、どんなに物いりだか……こっちが食えなくなっても面倒見なけりゃ済まなくなるんだぞ」

そんなものかと思いながらも冬子は、自分の家にたよって来るような近しい縁者のないことを不幸なことのように感じていた。と言っても誰も居ないわけではなく、東京に近い町の軍需工場には二人の姉が働きに行っていたが、まだ若い独身者なので無理をしてまで招き寄せる心配が少なかったのだ。

お葉さん一家は、冬子の家にとって、まるで赤の他人で、一千戸近い戸数の村の中でもたよりにできる血縁は一人も居ないという話であった。それを村長の口ききで、父が引き受けてきたのだが、どういうわけか頼まれたいきさつについて、父は家族にくわしい説明をしなかった。ただ一家の主人という人が鉄道省の役人で、仕事の都合上自分で家族の面倒が見れないのだということと、村長自身が、（お葉さんをたのむ）と言ったということから、冬子の家では否応なしに面倒を見るハメになったらしい。母は最初からその奥さんを、「お葉さん」と呼んだ。

「あの人達は、おら家の疎開者と同じだね」

念願がかなった思いで、冬子は嬉しくて仕方がないが、母は相手にしなかった。
「なんとしても同じ家で暮すんでなくて、やれやれだ。厭なことは見て見ぬ振りができるでな、いくらかたすかったでや……」

生活が落着いてくると、お葉さんは子供達を連れて、しょっちゅう冬子の家へやって来るようになった。いつも着ているのは最初の日のモンペの上下で、母はもったいなかった。
「これは錦紗でねえかい。たいしたもんだ」
「これしかないんですよ」
細い首をよじるようにしてお葉さんは笑った。東京生れの東京育ちで、千葉へ疎開する前と、してからと二度焼け出されて、もう行く所がないと思ったが、主人の部下の紹介で、こちらへ御厄介になりました、とお葉さんは少し甲高い声で話した。
「これで、お米をゆずっていただけないでしょうか」
ある日お葉さんは、毛糸のショールを持ってやって来た。庭先で遊んでいた冬子がのぞくと、それはエンジ色に白をあしらった配色で、母には派手過ぎる品物である。母はしばらく撫でたりもんだりして見ていたが、突き返すようにお葉さんの手にそれをもどした。
「いい物らしいが、今は六月だでな……冬まで使わねえ物を引き取っても」

「あの、そんならその仕事でも、お手伝いさせてください」
縁先に腰を降ろしたお葉さんは、今にも母のやりかけていた仕事に手を出しそうであった。それは、もうじき掃き立てられる春蚕の飼育に使われる、糸網の修理であった。母はあきれ顔で笑いだした。
「こりゃ、町場の人にはできねえだよ」
「どのくれえいるだね。少しなら分けてやるだよ」
居合わせた父が口を出すと、お葉さんはまるで拝むように頭をさげて、すぐ帯の間に手を入れた。小笊に米を入れたお葉さんが帰ってからしばらくの間、父と母は口争いをした。
「あんなことをして、癖になる。これから先が長いというのに」
「ほかに頼る所がねえ人達だ。一度や二度、仕方があるめえ」
「他人事かいな。家だって米はかつかつで、毎日芋や麦で食いつないでいるだに……」
「死ぬ時は、みんないっしょだ」
冬子は父の言葉で胸を撫でおろし、さっそく久夫の家へ遊びに行きたくなるのであった。借りた部屋は八畳一間で、行李や木箱や布団の積み重ねた間にカーテンを吊って、そのこっち側で子供達がよく勉強をしていた。縁側にはバケツや洗い桶にまじって、エントツのついた丸いパン焼き器や、縁の欠けたコンロが置かれたりしていた。冬子はいつも、「君代さん、遊ぼう」と声をかけたが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

心の中では久夫だけが居てくれることを願っていた。君代は冬子より一級下で、その妹はまだ二年生であった。女学生の長女は、安子と言って疎開して数日後に一人で東京へもどって行った。学徒動員された工場で暮しているのだとお葉さんは言った。

冬子は、君代があまり好きではなかった。手脚が細くて、色が白く、誰にでも甘えた口のきき方をするくせに、冬子に対しては、時々大人のような乾いた調子でものを言った。冬子が君代に聞かれた算数の問題で首をひねっていると、「勉強あきて、秋田県、馬のしょんべん長野県……」と大声で言って、ばたんと教科書を閉じたりした。そんな時冬子は、一家が越して来た日に君代がやった失敗を思い出して、いい気味だと思うのだ。

冬子の家には二ヵ所に便所があって、一つは廊下伝いに行く奥座敷の外側で、普段は使用されない来客用のものであったが、そこにはきちんと上履きがついていた。もう一つは、庭の隅のどこの農家にもある下肥用の便所で、野良仕事の土足で出入りする粗末なものであった。最初の時、君代はその扉を開けてしばらく眺めていたが、ついと跣足になって内へ入ってしまった。見ていた冬子の母が笑った。

「田舎のお便所はきたないで、靴を履いたまま入ってもいいだよ」

出て来た君代は、口をへの字にして、跣足のまま裏へ駈けて行き、そこの小川でいつまでも足を洗っていた。冬子は君代には奥の便所を借すまいと思っていた。下の妹は可愛いところがあって、

冬子を村の友達の口真似で、「フウちゃん、フウちゃん」と呼んでまつわりついた。

久夫ははじめから口をきかなかった。妹達とふざけている時でも、冬子が行くと、すっと仲間からはずれてラジオを聞く振りをしたり、ひっくり返って本を読み始めたりした。学校でも、たまに顔が合うと、怒ったように睨みつけてはなれて行く。それでも冬子は、久夫が自分の家に関係があるのだと思うことで、今迄味わったことのない気持のふくらみを感じて、自分を小馬鹿にしているような君代の態度も我慢できるのであった。もともと久夫は無口であったが、それでも一家が、時たま冬子の家の夕食に招かれた折りなど、食事の後で、父や母がなにか話しかけると、歯切れのよい言葉で素直に答えたり、笑ったりした。そんな時は冬子と視線が合っても睨んだりはせず、黒目勝ちな大きな瞳を真直に向けてよこした。久夫は髪の毛が濃かった。いがぐり頭の型が良くて、眉の太いはっきりした目鼻立ちは、それだけで村の子供達を引きはなしていたが、学校の成績も、転校一ヵ月でその優秀さが冬子の耳にも入ってくるほどであった。

「久夫さんは、u中学を受けなさるそうだね、たいしたもんだ」

冬子の母が又聞きの噂をお葉さんにただすと、お葉さんは心細そうに眉をひそめた。

「大学迄やりたいのですが……戦争がどうなりますか」

u中学は、u女学校と同じく、この地方の名門校で、村ではごく限られた資産家の子供しか入学できなかったので、冬子の母は、その上の大学と聞いてただ感心して首を振るだけであった。冬子

はそんな母の顔を眺めながら、漠然と自分と久夫との間に横たわる遠い広がりを計っていた。戦争や疎開がなければ、久夫とは口をきき合う縁も生じなかっただろう。冬子は、自分も女学校へ行きたいと思った。

「冬子さん、あんた女学校へ行きなさい。今から心がけて、お家の人にたのんでおくのね。あんたの成績なら必ず受かるんだから、先生も折りを見てたのんであげる」

受持ちの女の先生の熱心な言葉が、時には熱く激しく冬子の気持をそそのかすようになった。中学の制服制帽の久夫と、女学校の制服姿の自分を空想の中で並べるたのしさは、ときとして、冬子の夢の中にまで現れることがあった。それでも冬子は、口に出して父や母に進学の希望を伝えることはできなかった。まだ五年生だというゆとりからでもあったが、本当は冬子には自分の家の生活状態がよくわかっていたのである。

作った米の半分以上が、村の地主の倉に運ばれることや、二人の姉の送金がたよりで暮していることを知っていた。今は戦争で大変な時なのだから、自分一人の我儘を持ちだすのはよくないのだと、冬子はそんなふうに自分を言いくるめてみたりした。するとやっぱり久夫は冬子にとって遠い存在であり、頭のあがらない相手であった。

背戸にあるぐみの実が熟れて地面に落ち、植えつけの終った稲が青黒く繁茂する頃になると、山の中の冬子の村の頭上にも、時々B29が姿を見せるようになった。県境にある大きな市の工場を爆撃

に来るのだと、大人達は言い合った。どこかわからない、遠い地の果てから、ヅヅヅ……と重い地響きが伝わってくることもあるようになって、学校では大慌てで避難訓練を始める始末であった。山峡の帯のように細い村の上空を、白く光る飛行機雲が流れ、鋭い金属音が裏山に消えてから、子供達は机の下へ逃げこんだり、校庭の向うに迫っている杉山へ走ったりした。

そんな夜、お葉さんは必ず久夫達を連れて、冬子の家へやって来た。

「もうどこへも逃げる所はないのに、この戦争はどうなるのでしょうね」

大人達がヒソヒソ話しをするかたわらで、冬子は、久夫や君代から、東京の空襲のようすを聞かされていた。

「君、焼夷弾の落ちてくるの、見たことないだろう。遠くで見ると花火みたいにきれいだよ」

久夫の、君と言う呼びかけが、どきんとするほど耳新しくて、冬子は夢中でうなずいていた。ようやく話しかけてくるようになってからも久夫は、冬子の名は呼ばずに、君、とぶっきらぼうに声をかけた。仲間の疎開児童がすぐ覚えて使う、「おれ」とか、「おめえ」と言う村の言葉を、久夫はあまり口にしなかったが、君代の方は平気で、「おらとこのお父さまがな……」などと変なアクセントでしゃべり散らして得意になっていた。

その、「お父さま」と呼ばれる一家の主人が訪ねて来たのは、疎開してから二カ月も過ぎたむし暑い日の夕方であった。

いつになくきれいに身繕いをしたお葉さんと、子供達に取りまかれてやって来たその男の人は、冬子が息を呑んだほど久夫によく似ていた。大柄で恰幅がよく、衿元と袖口に、ジャバラの縫い取りのある詰め衿の洋服を着ていて、柄に似合わないやさしい低い声で、父と母に家族が世話になる挨拶をした。

「東京へ御用がおありでしたら、早めに知らせてください。切符の手配を致しますよ」

そんな言葉も終りは聞き取れないほど、子供達は父親にまつわってはしゃぎまわる。久夫迄がめずらしくお葉さんにたしなめられるほどであった。翌日の夕方冬子が遊びに行くと、もう父親は帰京した後で、お葉さんが暮れかかった部屋の中で一人で横たわっていた。髪はほつれ、顔色も悪く、昨日とは別人のようにとげとげした目つきで、子供達に小言を言ったりした。冬子が帰宅して、母にそのことを告げると母は、「又、ヒステリーを起こしているずら」と薄く笑った。冬子は、母の方が本当はヒステリーなのではないかと、厭な気分になるのである。

「町場者は図々しくて、やりきれねえに」

最近の母の陰口は日増しに露骨で口汚なくなっていた。米や味噌を気持よく分けてやったのは二、三度で、やがて部落の誰彼から、他家の相場を聞いてきて、「おら家じゃ、まるで施しをしているみてえだ」と、父にまで当たるようになった。一日に二度、三度とお葉さんがお茶の時間に来合わせたり、風呂を湧かすたびに早々と一家がやって来たりすると、母は怒って奥へ引っこんでしま

うことさえあった。それでもお葉さんはやって来た。もう取り替える品が無いから、畑の草取りでもさせてくれと坐りこんだり、湯飲み茶わんに一杯の梅漬けの汁欲しさに二時間もねばったりした。その汁を、冬子が無断で久夫に持たせてやった時、母は、「この餓鬼！」と、冬子を罵った。

冬子にとって一番嬉しいのは、人手が欲しい蚕の上簇の時や、田麦の刈り入れや脱穀の折り、お葉さんや久夫が手伝いに来て、そういう時は父と母が上機嫌で、お茶や食事を振舞うことであった。甘藷のまじった蒸しパンや、野草を搗き込んだ麦飯を、無言で頬張る久夫を見ていると、冬子は自分の方が先に満腹になった気がした。そんな夕食の後、子供達だけで、竹箒を手に蛍を取りに出かけたりすることがあって、冬子が青葱の尖った葉先に、蛍を幾匹も入れて見せると久夫は、「蛍が息苦しいから、外へ出しておやりよ」と、大人のように命じたりした。冬子は久夫の言葉なら何でも納得ができ、素直な気持にもなれるのであった。

東京に大空襲があったと伝えられた数日後、お葉さんの家には長女の安子がもどって来た。動員先の軍事工場が焼けたので、次の勤務先がきまるまで、こちらにおりますのでよろしく、と切口上で挨拶に来た。最初の時より痩せて顔色が悪く、大きな目が吊り上がって、ギスギスした感じが体中に漂っていた。

「東京者にしては、器量の悪い娘だ」

母は自分の家に余計者がころがりこんででも来たように、顔をしかめて毒づいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com